

日本の吹奏楽専門誌における特集記事の内容分析

—1980年-1990年の「バンド・ジャーナル」と
「バンド・ピープル」を対象に—

A Content Analysis of Feature Articles in 2 Magazines about Wind Music in Japan
—“Band Journal” and “Band People”, 1980-1999

Kyosuke Ohkura

大倉 恭 輔

英語コミュニケーション学科准教授

抄録：

1980/昭和55年に新しい吹奏楽雑誌が創刊された。これは吹奏楽愛好者をターゲットとする市場が拡大したことの証左といえる。このとき、新旧の雑誌はそれぞれ差別化をはかったと推測される。そこで、これら2誌における特集記事の内容分析をおこなった。それによって、当時の吹奏楽界の動向と変化を理解するための手がかりとするためである。

その結果、後続誌ではタイトルのつけ方・表現が親しみやすくなっているものの、2誌の間で内容面に大きな相違点はないことが明らかとなった。これは、1980年代の時点でいわゆる「吹奏楽コンクール至上主義」が確立されていたためであり、吹奏楽専門誌に対する読者のニーズは変わっていなかったためであると解された。

Summary：

A new wind music magazine was published in 1980. That is as a result of the expansion in a wind music market. So it is assumed that each magazine plans for differentiation. A feature article of two magazines was compared to prove this hypothesis. As a result, the following 3 points were proved. 1) The newer magazine expresses contents by words of young people. 2) There are no differences in the contents of feature articles of two magazines. 3) “Contest Supremacy” is established in the 1980's.

キーワード：吹奏楽、バンド・ジャーナル、バンド・ピープル、1980年代、1990年代、内容分析

Key Words：wind music, “Band Journal” magazine, “Band People” magazine, 1980's, 1990's, content analysis

はじめに

吹奏楽に関する雑誌は戦前から存在したが、戦後まで継続したものはない。¹⁾戦後になってからは、まず「吹奏楽研究」(吹奏楽研究社)が1956/昭和31年に創刊された。しかし、1964/昭和39年に廃刊となっている。次いで、「Band Journal」(音楽之友社)が1959/昭和34年に創刊され、2015/平成27年10月号をもって60周年を迎えている。そのことから、戦後の日本の吹奏楽の発展と「Band Journal」誌の歩みとは大きく重なる部分があるといつてよい。

戦後の日本社会が変化し続けてきたように、戦後の吹奏楽の世界も変化し続けてきた。同時に、そうした変化は同誌の誌面にも反映されるものと思われる。すなわち、同誌の内容・誌面構成の変化などを分析することは、日本の吹奏楽界の変化と方向性を理解する上でひとつの手がかりとなろう。

この、ほぼ唯一の吹奏楽専門誌という立場にあり続ける「Band Journal」誌にはふたつの側面があるといつてよい。ひとつは、吹奏楽の世界における一種のオピニオン・リーダー的な性格である。いいかえるならば、あるべき姿(手本)の提示である。もうひとつの側面は、読者のニーズに応えた企画や誌面構成が求められる商業誌という部分である。²⁾

手本の提示と読者のニーズは必ずしも相反するものではない。ことに、スクール・バンドが中心となっている日本の吹奏楽界において、「どのような方向を目指すべきか・どのように演奏すべきか」などの内容は、常に求められる企画であるといつてよい。

では、そのようなオーソドックスともいえる誌面構成に変化が生じることがあるのだろうか。あるとすれば、どのような要因によるものだろうか。そのひとつに競合誌の存在を挙げることができる。競合誌ができるということは、購買者層すなわち市場に広がりが出てきたためである。そうして、それは従来の吹奏楽愛好者とは異なった目的や選好を有した層の誕生を示唆するものといえよう。同時に、それは日本の吹奏楽界にある種の変化が生じたことの反映であると考えられる。

2000年代以降も吹奏楽関連の雑誌は誕生している。しかし、本稿では「Band Journal」誌と「Band People」誌が並立した時代(1980年-1999年)に焦点をあてる。これは、雑誌という存在が従来型のプリント・メディアとして機能し得た時代であり、他の要因による影響を考慮せずともよいという利点があるためである。事実、これ以降はインターネットの普及やいわゆる出版不況によって、多くの雑誌が休・廃刊となりあるいはウェブ上に活動の場を移すこととなり、同一条件での比較が困難となっている。³⁾

そのような諸要因を考慮しての分析は後日に回すこととし、まずは両誌の誌面構成の中から、とくに「特集」記事のあり方を中心に比較をおこない、当時の吹奏楽界・吹奏楽愛好者のニーズや興味対象などの共通性と相違点を見いだすこととする。そうして、どのような変化が生じ今日にいたっているのかを明らかにすることで、日本の吹奏楽界の成立と特質を理解するための一助としたい。

調査の目的と方法

01 調査の目的

「Band Journal」と「Band People」が競合していた時期の特集記事を比較することにより、当時の吹奏楽界における論調のあり方と変化を明らかにする。

また、そこから当時の吹奏楽愛好者のニーズとその変化を明らかにする。

なお、本論は、より詳細な内容分析のための課題探索的なものとする。

02 調査の対象と方法

a 対象

「Band Journal」と「Band People」の1980年4月号から1999年3月号（「Band People」休刊年）までの目次ページ。（各228号分）⁴⁾

b 方法と手順

- 1) 内容分析。
- 2) 対象期間の目次の全体的な特徴の把握。特集記事およびページデザインに加え記事タイトルの表現など。
- 3) 特集を中心とした各号の主要な記事を各号ごとに記録の上、内容を検討の上、グルーピングおよび比較。

なお、グルーピングに際しては、他ジャンルの音楽雑誌の目次構成を参照するとともに、音楽之友社によるアンケート記事を参考とした。

音楽之友社は、「Band Journal」創刊60周年記念の際、同社サイト上で読者アンケートの結果を掲出している。これは広告出稿を検討している企業などに向けたものであり、どのような方法で実施された調査であるのかは不明である。しかし、期待度のパーセンテージについてはともかく、そのテーマ分類については納得できる部分がある。たとえば、他のジャンルの音楽雑誌においても、同様の誌面構成をみることができるからである。

tab.1 Band Journal 読者の期待する記事

テーマ	
楽器関連の記事	29%
奏法・練習方法	16%
プレイヤー	16%
曲・作曲家・楽譜	13%
楽器小物・周辺アイテム	4%
指導法	2%
その他	20%

(音楽之友社, 2015)

その上で、特集記事を下記の11種類に分類した。

- | | | |
|------------|-----------|------------|
| 1 コンクール報告 | 5 楽器関連 | 9 演奏会演出 |
| 2 課題曲関連 | 6 楽曲・楽譜理解 | 10 作曲家・演奏家 |
| 3 コンクール対策 | 7 奏法・練習法 | 11 その他 |
| 4 他コンクール報告 | 8 運営・指導法 | |

なお、「Band People」誌の場合、明確に「特集」と銘打たれていないケースがある。このような場合、全体的な目次の内容や割り当てられているページ数などから、特集と判断されるものを集計対象とした。

加えて、号によっては「第1特集」「第2特集」のように、複数の特集が組み立てられている事例がある。これらもそれぞれ特集記事として集計対象とした。したがって、今回の分析対象の号数と特集数は一致しない。⁵⁾

結果と考察 01 目次ページのデザインと表現

「Band Journal」は、長い歴史の間に数回のデザイン変更をおこなっている。1959/昭和34年の創刊時からは、縦書きで、一般書籍での目次のようなページ順に記事が並べられているものであった。

それに変化が生じたのは、1966/昭和41年4月号からである。そこでは、ページの右半分は横書きで目次が、ページ左半分は縦書きで巻頭言（横2段組）が並ぶというレイアウトになっている。このデザインは約2年間続いた。

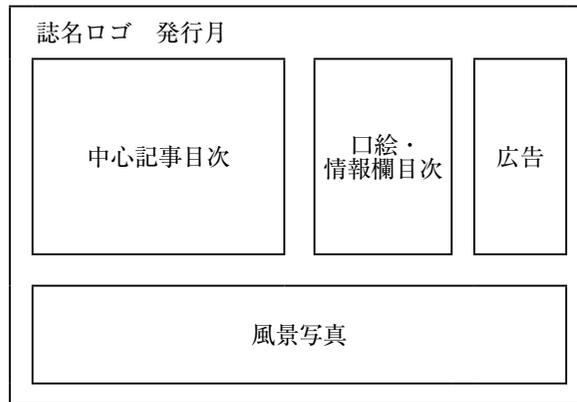
1968/昭和43年7月号からは、見開きページに縦書きという形式になる。以降、10年間、このデザインが続く。

そうして、1977/昭和52年4月号から大きな変化が生じる。まず、ページ全体で横書きとなった。記事名などの文字列は10度ほどの角度をつけた右肩上がりで、見開きをまたいで配置されるというものであった。ただし、この文字列に角度をつける試みは同年12月号で終了する。翌号からは、見開きページのそれぞれに項目名・記事名が、角度をつけずページもまたがない横書きで表記されることとなる。

今回の分析対象の初回となる1980/昭和55年4月号のデザインは、上述の1977年4月号から採用されたデザインの流れの中にある。見開きの左半分に特集をはじめとする中心的な記事名が並び、右半分に口絵・グラビア・ニュース欄などの記事名が配されている。加えて、号によって位置や形状は異なるが、見開き全体の1/4程度のスペースに風景などの写真が添えられている。

特集記事は一般記事よりも文字の大きさや太さが異なり、当該号の特集が何であるかがひと目でわかるようになっている。総じて、記事の種類によって配列されており、視認性の高いものとなっている。

fig.1 1980年4月号目次ページレイアウト：Band Journal 誌



このデザインは1984/昭和59年3月号まで続く。途中、1981/昭和56年1月号から1983/昭和58年3月号まで、目次欄に当該号の表紙写真が添えられた。また、1982/昭和57年1月号から、いくつかの項目名が白抜きの見出しになり、誌面にデザイン性が出てくるようになる。さらに、1983/昭和58年4月号前後から、記事名を縁取り文字で表記することが多用され始める。

そうして、1984/昭和59年4月号から、目次ページのデザインはさらに大きな変化をとげる。1968/昭和43年7月号以来の見開き形式をやめ、1ページ内に縦長にレイアウトする形式に変更された。

まず、当該号からは1ページが縦3段組横書きとなる。中央の段には風景写真とミュージシャンの写真などが配置され、その左側には中心的な記事群が、右側には連載記事などの項目名が配置されている。

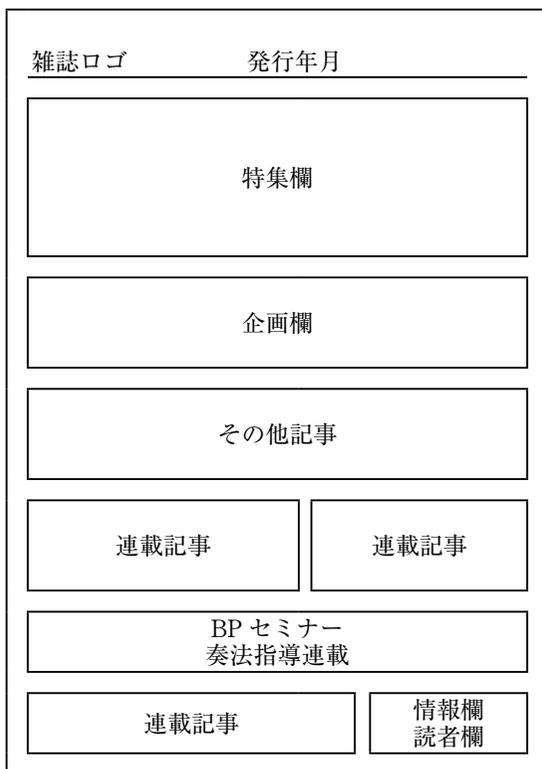
その後、1987/昭和62年4月号には横4段組縦書き（最上段は誌名表記部分）となり、1989/平成元年4月号からは縦3段組横書きとなり、それぞれに記事名が記載される形式となった。さらに、1996/平成8年4月号からは縦2段組横書きとなり、今回の分析対象である1999/平成11年3月号までこのデザインである。なお、この間も目次ページ内には、ページの1/3前後のスペースをとった写真と、来日アーティストなどの写真が配置される形式となっている。

「Band Journal」の目次ページが、1980/平成55年以降も縦書きと横書きを繰り返したのに対し、「Band People」は創刊から終刊まで横書き表記であった。

まず、創刊号を除き、当初のページレイアウトは、1ページ全体を幅広く目次として使用している。⁶⁾ また、特集記事や連載記事群の部分を枠で囲ったり、さまざまな字体を混在させたりするなど、視覚的に賑やかな印象を与えるデザインになっている。ただし、基本的には横書き段組なし（段抜き）のレイアウトである。

1985/昭和60年4月号からは、目次は巻末に移り、1ページ内に縦2段組横書きとなる。その半分には編集後記と過去1年間のバックナンバーの特集名一覧が記載され、残る半分が目次部分となる。スペースが限られるため、目次部分は特集も連載企画も文字サイズは同一となり、文頭

fig.2 1980年5月号目次ページレイアウト：Band People 誌



に「●」をつけて目印とするデザインとなった。

なお、当該号からは目次欄の上部に表紙写真を掲載され始める。「今週の表紙っ子」と名づけられたそれは、一般の高校生などがモデルであり、写真の下部には氏名も記載されている。この企画は一時中断するが、1998/平成10年4月号から復活し休刊まで続く。

1994/平成6年4月号からは、表紙がプロ・ミュージシャンとなり、目次ページにも表紙写真が掲載される。

さらに、同年5月号からデザインが大きく変更される。ページ全体が上下で2分され、上段と下段の間に横1段で雑誌ロゴ・発行月・表紙写真が配置されるようになった。上下段はそれぞれ縦3段組横書きとなり、上段左側は特集記事などのため、右の段よりも幅広くなっている。

1995年5月号からは、ページ上部に主要記事を横1段横書きで配置し、下部には連載ページなどを縦2段組横書きで配置するようになった。また、このデザインは休刊まで維持された。

1960年代から70年代は社会が大きく動いた時代であり、出版の世界もデザインの世界もさまざまな新しい試みがなされていた。そうした中、「Band Journal」の目次デザインはオーソドックスなスタイルをとおしてきた。上述のとおり、1980年代半ばに入ってからスタイルは変化し始めたが、複数字体の使用や縁取り文字の使用などが目を引くぐらいで、レイアウト自体はそれほど複雑なものではない。

対する「Band People」誌の目次ページは、創刊から45年の間、文字の書体と大きさの多様

tab.2 目次ページのデザインとその推移

発行年・号数	Band Journal	Band People
1980年4月号	見開き・ページをまたぎ下部に写真。字体・大きさなどの多様性は少ない。	1ページ・余白少なく段抜き横書き。字体・大きさは多様性に富む。
1981年1月号	目次欄に表紙写真掲載（1983年3月号まで）	
1982年1月号	いくつかの項目名での白抜き表記開始。	
1983年1月号	記事名自体の白抜き表示開始。	
1984年4月号	見開き形式から1ページ内表記に変更。縦3段組横書き・中央の段には写真掲載。	
1985年4月号		目次を巻末に移動。縦2段組横書きに変更。目次と編集後記で段組をわける。記事内容によらず、文字サイズは同一。表紙写真が高校生となり、目次欄にも同じ写真が掲載される。
1987年4月号	横4段組・縦書き表記に変更。	
1989年4月号	縦3段・横書きに変更。	
1994年4月号		表紙写真がプロ・ミュージシャンになる。
1994年5月号		ページ中央に白抜きで雑誌ロゴ・発行月・表紙写真を配した部分を置き、上部・下部を縦2段組横書きとした。
1994年6月号		原則的に上部を縦2段組・下部を縦3段組横書きに変更。ページ中央の白抜きの部分は継続。
1995年5月号		上部に主要記事を横1段組に、下部に連載記事などを縦2段組横書きに変更。
1996年4月号	横2段組・横書き表記に変更。	
1998年4月号		表紙写真が高校生に戻る。デザインは継続。
1999年3月号		当該号で休刊。

性で見せるデザインであった。それが、巻末の半ページ内に記事名が同一サイズで箇条書きのようにレイアウトされた時代を経て、1994年以降、「Band Journal」のページデザインに近い方向性に落ち着いていたことは留意すべきだろう。

ただし、「Band People」では、校正・校閲に不十分な部分があることを付言しておかねばならない。たとえば、表記が統一されていないケースが散見されることである。年度を下2ケタであらわす際、「85」とする場合と「85」とする場合が混在していること。また、号によって同じ連載のタイトルが微妙に異なっていることなどである。

このような編集スタッフの力量に差があるとはいえ、1980年からの20年間は、両誌にとって、文字の書体と大きさに工夫を凝らしながら、段組みなどを複雑化させずに視認性を維持しようと

した時代であったとあってよい。

結果と考察 02 特集記事の内容と推移

本項では、対象2誌の特集記事がどのようなものであり、20年間でどのように変化してきたのかを確認する。なお、すでに述べたとおり、「特集」と銘打たれない場合や「第1・第2特集」のような場合があり、正確な特集記事数は算出できない。今回の分類では、それぞれ228号において240-250本前後の特集数となっている。

その上で、まず特集記事全体の分布について確認し、次に年度別および発行月別の特集内容の推移について確認する。

tab.3 特集記事分類

特集分類	1: コンクール	2: 課題曲関連	3: 大会対策	4: 他大会報告	5: 楽器関連	6: 楽曲・楽譜
Band Journal	57 (23.3%)	44 (18.0%)	10 (4.1%)	17 (7.0%)	46 (18.8%)	5 (2.0%)
Band People	52 (20.6%)	48 (19.1%)	5 (2.0%)	14 (5.6%)	35 (13.9%)	9 (3.6%)
	7: 奏法・練習	8: 運営・指導	9: 演奏会演出	10: 作者・演者	11: その他	特集記事合計
Band Journal	22 (9.0%)	10 (4.1%)	3 (1.2%)	17 (7.0%)	14 (5.7%)	245
Band People	52 (20.6%)	11 (4.4%)	6 (2.4%)	5 (2.0%)	15 (6.0%)	252

tab.3からわかるとおり、両誌ともに「全日本吹奏楽コンクール」に関連した特集記事が大きな割合を占めている。「1. コンクール報告」に関する特集が2割を超えるのは、本大会の他に地方大会の結果も含まれているためである。それは予選の結果にもニュースバリューがあることを意味し、そのまま吹奏楽の世界における同コンクールの影響力のあらわれであるといつてよい。

「2. 課題曲関連」は、同コンクール出場団体に課せられる「課題曲・自由曲」に関するものである。それぞれの年度の課題曲を、どのように解釈・分析し演奏に結びつけるかは、受賞に関わる根本の部分である。課題曲については「作曲者が語る」などのタイトル記事で特集の一部が構成されることもある。作曲者の意図を知らせることが、入賞を果たしたい読者のニーズに応えるものであることはいうまでもない。また、各年度の「自由曲一覧」も、ほぼ毎回、特集の一部となっている。これは、上位入賞団体が選んだ自由曲の傾向から、受賞の手がかりを得ようとしているためと解される。

これに対して、「3. 大会対策」は記事数が少ない。分類項目策定にあたり、最初に目次をみていたところ、「Band People」の目次にそのような趣旨の文言が目についた。そこで項目を立ててみたところ、本調査の目的である「特集名」の中にはあまり入っていなかった。とはいえ、「コンクール報告」の特集内の項目の中にそうした趣旨の記事があり、入賞対策の記事が少ないわけではない。

いずれにせよ、すべての特集のうち、コンクール関連のものが4割以上を占めている点は、他の音楽関連の雑誌にはみられない特徴である。それはまた、日本の吹奏学界におけるコンクール

の影響力の反映であるといえよう。

「4. 他大会報告」は、全日本吹奏楽連盟が主催する「全日本アンサンブルコンテスト」の他、「日本マーチングバンド協会による「マーチングバンド全国大会」や日本バトン協会による「バントワーリング全国大会」など、吹奏楽と関連の深い団体の全国大会に関する特集である。⁷⁾ こちらも特集としての数は少ないが、大会報告はかならず記事化されている。

「5. 楽器関連」は、個々の楽器に焦点をあてた特集である。ここでは扱う範囲が広く、それぞれの楽器の奏法に関する部分からメンテナンスに関わる部分までが対象となる。加えて、楽器の基礎知識などの記事も含まれる。その意味で、「7. 奏法・練習法」の項目と重なる部分があるが、特集名としては明確に分離している。

たとえば、tab.1 で掲出した「Band Journal 読者が求める記事」というアンケートでは、「楽器関連記事 = 29%」「奏法・練習方法 = 16%」で1位と2位になっている。実際、今回の調査でもこのふたつが、コンクール関連の特集以外では、もっとも高い特集化率になっている。すなわち、各パート（楽器）担当者が直面する問題とその解決という点で、ニーズの高い特集なのだといえよう。

「6. 楽曲・楽譜の理解」もまた、特集数としては少ないが、コンクールの課題曲の解説や連載記事などにおいて、楽曲の理解・分析（アナリーゼ）に相当する部分は触れられている。そもそも、それらは特集記事にはなりにくいものといえてよい。日本の吹奏学界の主たる層は生徒・学生であり、彼らがコンクールをめざした日々の活動の中で楽曲理解をおこなっているとき、一般的な楽曲理解のための記事に興味をいだく層は少ないものと思われる。

「7. 奏法・練習方法」については「楽器関連」の項目で触れたとおりである。ただし、両誌の傾向をみたとき、「Band People」の方が特集になる率が高い。日本の吹奏楽の世界は中・高校生を中心として形成されている。すなわち、「スクール・バンド」が活動の主体である。しかし、専門の指導者の下で、地方大会を勝ち抜き全国大会へ進めるような学校（吹奏楽部）は限られている。専門のコーチもつかない中で活動をしているところも多い。奏法などについての特集は、そうした環境の中で努力している層のニーズに応えたものと解される。

「8. 運営・指導法」も特集としての掲載数は少ない。豊富な楽器経験を有するメンバーに恵まれないスクール・バンドにとって、新入部員の指導に関する情報は有益なもののはずである。だが、自身も楽器修得中である中では、他者への指導法よりは自身の練習や上達の手がかりになるような記事の方が望まれるのだろう。

吹奏楽のコンサートでは、奏者が振りをつけたりステップを踏んだりするといった演出がなされることがある。「9. 演奏会での演出」は、そうした部分へのニーズがどの程度のものなのかを知るために項目化した。

一定レベルの吹奏楽部では、定期演奏会や地域の催し物への参加といった、コンクールとは異なる目的・環境の中での演奏をおこなうことがある。そのとき、聴衆へのサービスという見地から、演奏以外の演出を導入するようである。しかし、コンクール関連の特集記事の多さをみればわかるとおり、読者の主たる興味はコンクールとそれに関連する話題である。ちょっとした tips

ならばともかく、特集記事として演出法を読みたいというニーズはほとんど存在しないようである。

他ジャンルの音楽雑誌と比較して、もっとも興味深い点が「10. 作者・演奏家」の項目である。音楽雑誌には、大きくわけてふたつの方向性があるといつてよい。ひとつは読者が主として聴衆であるもの。もうひとつは読者が主として演奏する側であるものである。もちろん、聴衆であるとともに楽器も弾くという読者も少なからず存在する。だが、雑誌および記事の方向性としてそのような分類が成立する。

読者の多くが演奏者である雑誌の場合、そこでの記事は、プロの演奏家についての記事（奏法・インタビューなど）や楽器に関する記事（新製品・プロの使用機材・修理など）が中心的な話題となる。今回の調査対象である2誌ともに、プロの演奏家などへのインタビュー記事はあるものの、特集としては1割にも満たない状態である。これは、吹奏楽専門の作曲家や演奏家自体が多

tab.4 特集記事分布：年別

特集分類	掲載誌	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987
1：コンクール報告	Band Journal	2	3	3	3	3	3	3	3
	Band People		2	3	1	3	3	4	3
2：課題曲関連	Band Journal	1	1	2	2	2	2	2	2
	Band People	1	3	1	2	4	2	2	1
3：コンクール対策	Band Journal			1	1				
	Band People		1	1					
4：その他コンクール報告	Band Journal	1	1	1	1	1	1	1	1
	Band People							1	3
5：楽器関連	Band Journal	1		1	1	3	4	3	4
	Band People	3	4	4	2	3	1	2	3
6：楽曲・楽譜理解	Band Journal		2			1			
	Band People				2				
7：奏法・練習法	Band Journal	1	3	4	2	1			1
	Band People	5	5	2	4	1	5	3	4
8：運営・指導法	Band Journal							1	
	Band People			1	2	1		1	
9：演奏会演出	Band Journal								
	Band People	1	1						
10：作曲家・演奏家	Band Journal	3	1	1	2	2		1	1
	Band People		1						
11：その他	Band Journal		2	1		1	2		
	Band People	1		3	1	2	1		1
BJ誌年別特集数合計		9	13	14	12	14	12	11	12
BP誌年別特集数合計		11	17	15	14	14	12	13	15

* 1980年は、「Band People」誌の創刊にあわせて、両誌ともに4月号からの計9冊の集計となっている。

** 1999年は、「Band People」誌の休刊にあわせて、両誌ともに3月号までの計3冊の集計となっている。

くないことに関係するものと解される。

ある程度、楽器は限られるとはいえクラシック音楽でもソロイストは多く、彼らは一種のあこがれの的である。これに対し、吹奏楽専門でソロイストとして活躍しているという人間の存在は聞かない。加えて、専門の楽団自体が少ないという点も挙げられよう。統括団体がいないために実態は不明だが、常設の吹奏楽団は、東京佼成ウインドオーケストラとシエナ・ウインド・オーケストラと Osaka Shion Wind Orchestra (旧・大阪市音楽団) そして東京吹奏楽団ぐらいだろうといわれている。

このような状態では、雑誌の巻頭を飾る特集として「作曲家・演奏家」がクローズアップされることは困難であろう。これは、ひとつには吹奏楽の世界のマーケット規模によるものと解されるが、たとえば他ジャンル間を横断的に活躍する演奏家・作曲家の登場によって、自体は変わっていくものと推測される。

1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	合計
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	1	57
3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	1	52
2	2	2	2	3	4	3	3	2	3	3	1	44
4	3	4	3	3	2	2	2	3	3	2	1	48
	1			1		1		2	3			10
					1					2		5
1	1	1	1	1	1	1				2		17
	1	1	1	1	1		3			1	1	14
1	4	1	3	4	4	4	2	2		4		46
1	2		3	4	1	1		1				35
		1			1							5
	1				2	2			2			9
2		1					2	2	2	1		22
4	1	2	1	2		3	3	3	2	2		52
1			1				1	1		3	2	10
1		1	1				1		1	1		11
			1				1		1			3
1						1				2		6
	1	3		1		1						17
1	1	1			1							5
2			1	1	1		1		1		1	14
		1			1	2		2				15
12	12	12	12	14	14	13	13	12	13	16	5	245
15	12	13	12	13	12	13	12	12	11	13	3	252

「11. その他」については、「基礎知識・Q&A」や「小物・アクセサリ」などに関するもの
他、コンクールの制度に関する疑問やプラスバンドとの相違に関するものといった、内容的にや
や踏み込んだものも散見された。

両誌の特集記事の全体像が把握されたところで、次に、それらを時系列でみた場合に何らかの
変化があるのか否かを確認する。

まずは、年度別の推移についてみる。

tab.4 からは、「コンクール報告」「課題曲関連」の特集が、毎年、複数回掲載されていること
がわかる。前者については毎年ほぼ3回掲載されており、後者についても1-4回と幅はあるもの
の毎年掲載されている。また、この傾向は両誌に共通しており、それぞれの雑誌とその読者にお
いて、吹奏楽コンクールが占める大きさをあらためて実感する。月別の推移の項でも論じるが、
「毎年3回の掲載」があるということは、年間12冊発行されるもののうち、3号分はコンクール
関連記事が特集されているということでもある。

なお、「3. コンクール対策」については、先述のように独立した特集記事としては少ない。し
かし、同趣旨の内容は「コンクール報告」特集の中に含まれていることも多く、記事自体が少な
いということではない。

これに対し、雑誌間で分布に差が出たものが「4. その他のコンクール報告」特集である。「Band
Journal」では、年に1回は特集がなされている。対する「Band People」では、1985年から
1995年の間は継続的に特集化されているものの、その前後の期間では特集されていないか間が
あいている。ただし、他項と同様に、特集として掲載されていないだけで、グラビアなどの他の
ページで写真つきで掲載されるケースも多い。

むしろ、特集の内容面で差違が生じていることに着目すべきであろう。「Band Journal」は「ア
ンサンブル・コンテスト」を継続して特集しているが、「Band People」は「マーチングバンド
全国大会」「バトントワリング全国大会」⁸⁾を特集していることが多い。両誌の選定におそらく
大きな意味はないと思われる。「Band Journal」と比較すると明るい印象のある「Band People」
にとって、見た目に華やかなマーチングなどの方が雑誌の性格にあっていると判断したのだろう。

いずれにしても、それぞれの雑誌において、20年間で変化してきた項目は見うけられなかつ
た。「10. 作曲家・演奏家」についていえば、「Band Journal」が3年に2回は特集していたものが、
1995年以降は掲載がなくなっている点であるが、これも強いていえばというぐらゐの変化であ
り、ここでは推測などはおこなわないこととする。

総じて、両誌が競合しあった20年間において、ある項目が特集から消す・新しい特集が出現
し定着するという事はなかった。また、いくつかの項目を除き、雑誌間で大きく異なる分布も
見いだせなかった。

最後に、発行月別の特集記事分布について確認する。なお、tab.5 が4月から始まっているの
は、日本の年度が4月開始であるためである。「tab.2 目次デザインの推移」でもわかるとおり、

tab.5 特集記事分布：月別

特集分類	掲載誌	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1：コンクール報告	Band Journal									19	19	19		57
	Band People							1	14	16	19	2		52
2：課題曲関連	Band Journal		17	6	1							19	1	44
	Band People		6	16	17	2	1					6		48
3：コンクール対策	Band Journal	2	1		3	1	1						2	10
	Band People		1	1	1				2					5
4：その他コンクール報告	Band Journal		1	15				1						17
	Band People	7	2		1			1					3	14
5：楽器関連	Band Journal	7	1	1	8	7	8	7					7	46
	Band People	3	2	2	1	7	7	5				3	5	35
6：楽曲・楽譜理解	Band Journal	1			2	1		1						5
	Band People		2			2	1	2	2					9
7：奏法・練習法	Band Journal	2		1	4	5	6	2					2	22
	Band People	7	6	1	1	5	8	6	1	3	1	6	7	52
8：運営・指導法	Band Journal	2				1	4						3	10
	Band People	2				2	2	2					3	11
9：演奏会演出	Band Journal				1			2						3
	Band People					1	2	3						6
10：作曲家・演奏家	Band Journal	3		2	1	3	2	4					2	17
	Band People	1										1	3	5
11：その他	Band Journal	2	1	1	1	2	1	1				1	4	14
	Band People	1	3	1	1	4	3					2		15
	BJ 誌 月別 特集数 合計	19	21	26	21	20	22	18	19	19	19	20	21	245
	BP 誌 月別 特集数 合計	21	22	21	22	23	24	20	19	19	20	20	21	252

* 対象冊数は、両誌それぞれ228冊。ただし、「Band People」誌の創・休刊号の発行月による。

** 1999年は、「Band People」誌の休刊にあわせて、3月号までの計3冊の集計となっている。

新年度号をもってデザイン変更がおこなわれたり新連載が開始されたり誌面の刷新がおこなわれる。

ここでもコンクールに関連する項目が目立つ。まず、11-1月までの3ヶ月間は基本期に「コンクール報告」のみの掲載となっている。また、「Band People」は9月と2月にも特集を組んだことがある。いずれにせよ、それだけ求められている内容なのだといえる。

2月と5-7月は「課題曲関連」の特集で埋まっている。「tab.3 特集記事分類」ではすべての特集記事のうち4割から5割近くがコンクール関連であることを指摘した。tab.5にもとづいて視点を変えてみれば、年間12冊のうち5-6冊でコンクール関連の特集がなされているわけである。

そのため、それ以外の特集は4月や8-10月に分散することとなる。どのような雑誌でも季節に応じた企画があり、専門誌でもその業界固有のイベントなどに応じて記事が作成される。スポーツ雑誌であれば、3月と8月は高校野球の記事を掲載するだろう。だが、月刊誌で年の半数の号において同じイベントに関する事項が特集されるという形態は、他に類をみないといってよい。

補足：記事タイトルの比較

前項で、2誌の特集記事の分類と比較という作業は終えたが、目次の記事名の文言について補足をおこなう。これは、特集記事の量的な分類ではわかりにくい部分を補うためであり、さらなる内容分析のための予備的な作業とするためである。

すでに述べたとおり、特集の企画のあり方については、両誌ともに本質的に大きな相違はみられない。また、目次自体のレイアウトなども対象期間の後期には似かよってきていることが確認された。では、両誌における差違はどのような点に見いだすことができるのだろうか。そのひとつが文言である。

目次デザインの項で指摘したように、長い間「Band Journal」の目次は一般書籍のような体裁であり、記事名も内容をシンプルに伝えるものであった。デザイン自体は1977/昭和52年4月号から大きく変化したが、記事名の扱いは変わらなかった。縦書きから横書きに変わっただけでなく、記事名などの文字列が10度ほどの角度をつけた右肩上がりになるというデザインではあったが、記事名の表現方法は変わっていない。

1977/昭和52年3月号 特集「これからの吹奏楽レパートリー」… 縦書き

新しい吹奏楽の方向と楽曲レパートリー
クラシック名曲のエディションをめぐって
やさしく楽しめる吹奏楽曲
ポップスの名曲10曲
マーチの名曲を求めて

1977/昭和52年4月号 特集「吹奏楽指導のポイント」… 横書き

実際の練習の中でなにが大切か
座談会
私の指導の秘けつ
音楽の積木を組みたてよう
機会をとらえて人前で多く発表しよう
90パーセント・プラス・アルファ

この傾向は、「Band People」が創刊された時も同じである。

1980/昭和55年4月号 特集「'80年代 管楽器の世界」… 横書き

80年代の管楽器の世界、その課題と展望
東京ブラス・アンサンブルを主宰して
東京チェムバー・グループのこと

オトテール・アンサンブルの演奏の視点

これに対して、「Band People」の創刊号は以下のようにになっている。なお、創刊号では、特集名があるだけでどのような記事から構成されているかは不明である。そこで、参考として、他の記事名を挙げる。

1980/昭和55年4月号

● 特集 ● 「ブローアップ '80・キミのサウンドを見つけろ！」

特集名横に小さく「吹奏楽のためのベスト選曲80もついでるゾ」とある。

★ 速報 ★ 『80年吹奏楽コンクール課題曲』はこれだ!!

★ 密着取材 ★ T・ジェファーソン高校のホットな7日間

“バンド・ジョーズ”ってなにになに!???

「Band Journal」の、ある種のきまじめなタイトル表記は1995/平成7年頃から変化し始める。そこで、「Band People」が休刊する1999/平成11年3月号で比較してみる。

前者が「Band Journal」、後者が「Band People」のものである。

特集1 新入部員獲得、今年の“奥の手”はこれだ!!

特集2 少ない人数でもバンドはデキる!!

特集 サウンドとビジュアルの華麗なる祭典

★ 第26回マーチングバンド全国大会

★ DCJ チャンピオンシップ

「Band People」休刊号は、特集および企画記事ともに、大会レポートやコンクール課題曲の作曲家インタビューのため、とくに印象的な言葉づかいにはなっていない。だが、タイトルに「★」マークをつけたり、特集以外の記事名において「！」マークに斜体をかけたりするなど、出版物の目次というよりは学生のノートのような雰囲気が残されている。

その意味で、「Band Journal」における、「デキる」といったカタカナとひらがなの混合やキーワードを「」で囲むこと、さらに「！」を重ねたり斜体をかけたりという部分は、「Band People」に近づいてきた観がある。逆に、休刊前の1-2年間をみると、「Band People」が初期のくだけた口調から離れて落ち着いてきている印象がある。

その意味で、「Band Journal」と「Band People」の20年間は、特集記事の内容ではともに大きく変化することはなかったが、目次のデザインと表現のあり方において両者が歩み寄るためのものであったといえよう。

まとめ

本稿は、ふたつの目的から雑誌の内容分析をおこなった。ひとつは、バブル期とその前後という社会が大きく動いた時期において、吹奏楽専門誌の読者たちの愛読誌へのニーズがどのように変化したのかを確認することである。もうひとつは、「Band Journal」と「Band People」という老舗雑誌と新規参入雑誌が競合することになったとき、それぞれがどのように差別化をはかったのかを確認することである。

そこで、1980-1999年まで20年間の特集記事を比較してみたところ、年次的な変化はみられず、特集の内容について相互に影響を受けた様子もみられなかった。これは、1980年の時点で、すでに「全日本吹奏楽コンクール」という大きなイベントが、スクール・バンドを中心とする日本の吹奏学界に大きな影響力をもっていたためと解された。そのため、企画内容と出版日程もコンクールにあわせられ、また、それこそが読者のニーズにそっていたため、変化することが困難であったためと推測された。

そのような吹奏学界の体制やニーズが固定化されていることにより、本質的な部分での企画の差別化は困難となる。後発の「Band People」も、特集記事の内容や日程などにおいて「Band Journal」と同様の傾向にならざるを得なかったものと解される。

本稿は、特集記事の内容分析をおこなうために、それぞれの雑誌における個々の記事や活動には触れてこなかった。たとえば、「Band People」は学校の部活動とは別に、個人が思い思いに参加する「吹奏族」という概念を作り活動の後押しをするなど、ユニークな側面を有していた。そうした新しい方向性を提示できた雑誌が休刊にいたったのは、ひとえに吹奏学界自体がある意味完成された枠組みの中にあり、その枠組みを壊すことが困難であったためとあってよい。加えて、わが国の吹奏学界のマーケット規模では、似たような内容の雑誌を共存させるポテンシャルがなかったことも挙げられよう。

今回の調査では、競合誌との相互の影響という点が主眼のひとつであった。そのために分析の時期を限ったが、今回の結果を活かしながら、次回は「Band Journal」の60年を対象とすることで、日本の吹奏学界の60年との照合をおこなう予定である。

注

- 1) 1933/昭和8年に「プラスバンド」が、1936/昭和11年には「バンドの友」が創刊されている。(戸ノ下 2013:98)
- 2) 出版事業が困難な中、音楽の様々なジャンルで専門誌が発行されている。そこで、主要なジャンルにおける代表的な雑誌の発行部数を確認し、「Band Journal」誌の位置づけについて再考したい。なお、出版業界における「発行部数」は公称であり実売数とは異なる。しかし、本項では参照値として発行部数を採用しておく。(雑誌新聞総かたろぐ 2016)
吹奏楽関連
Band Journal : 8万部
Pipers : 2万部 管楽器奏者向け
クラシック音楽関連
音楽の友 : 10万部

Harmony：2 万部 全日本合唱連盟会員頒布

邦楽・伝統音楽関連

邦楽ジャーナル：1.5 万部

ポピュラー音楽関連

ミュージック・マガジン：15 万部

Rockin' On：10 万部

その多寡の基準はないが、クラシック音楽専門誌と比較しても2万部しか変わらないことは、「Band Journal」誌とその読者層の厚みをあらわすものとして注目してよいものと思われる。

- 3) 「Band People」誌以降の主な吹奏楽関連専門誌の出版動向は以下のとおりである。
Pipers (杉原書店) 1981-2017 継続中 月刊 管楽器・クラシック主体。
Band Power (スペースコーポレーション) 1999-2017 継続中 ウェブマガジン
「Band People」誌の後継版といえる。
Wind-i (Aruso) 2004-2017 季刊 第9号(春号)で休刊
同年10月からウェブマガジンに移行
なお、2015年から、紙媒体の情報誌「Wind-i mini」(月刊)を刊行。
プラス・トライブ → BRASS Tribe (プロスコープ) 2006-2016 年2回 管楽器主体
第38号で休刊 休刊年から BAND LIFE へ移行
アインザッツ (学研) 2011-2012 不定期刊 中高校生対象 第4号で廃刊
BAND LIFE (プロスコープ) 2016-2017 継続中 季刊 管打楽器専門
- 4) Band People 誌最終号の編集後記には「通巻230号にわたって」とある。しかし、同誌の通巻番号は途中で飛んでいる号があるため、230号には満たない。
- 5) Band Journal 誌の1986年10月号とBand People 誌の1997年3月号は、ともに特集がなく、また特集に相当すると判断される大きな記事もなかった。
- 6) 創刊号の目次レイアウトは、方向性が定まっていなかったためか、第2号以降のものとはやや異なっている。そこで、ここでは第2号の目次レイアウトを模したものを掲出した。
- 7) マーチングについては、全日本吹奏楽連盟でも「全日本マーチングコンテスト」を主催しており、部外者は混乱する部分がある。
- 8) 主催団体は「バトントワーリング」としているが、ここでは調査対象誌での表記に従った。

References

日本オーケストラ連盟 加盟オーケストラ

<http://www.orchestra.or.jp/accession/> (最終閲覧：2017年12月10日)

音楽之友社 2015「Band Journal」媒体資料

https://www.ongakunotomo.co.jp/magazine/bandjournal/ad_html.html (最終閲覧：2017年12月10日)

戸ノ下達也 ed. 2013 日本の吹奏楽史 1869-2000 青弓社

雑誌新聞総かたろぐ 2016 メディア・リサーチ・センター

